

タイムマシン

石田 教子 (助手)

図書館は、タイムマシンであると思う。

タイムマシンは、もともとH. G. ウェルズ (1866-1946) のSF小説にでてくる架空の機械であり、人はそれによって時間の流れを越え、過去や未来を旅することができる。

例えば、経済学の父といわれるアダム・スミス (1723-90) の『国富論』(1776) を読むと、産業革命前夜の成長著しいイギリスにおいて製造業がどのように生まれ、そこで働く人々がどんな人々であったのかを感じることができる。また1776年は、アメリカがイギリス本国から独立した年でもある。したがって、アメリカをめぐるヨーロッパの植民地政策についても垣間見ることができる。私たちは、スミスがアメリカに起ころうとしていたこの歴史的な事件にいかにか心を奪われていたかを知る。アメリカはなぜ人口がどんどん増えてゆき、生産量も急速に増大し、そして豊かになりつつあるのか。両方の地域に住む人々をともに豊かにするために、本国にできることは何か。私たちは、活字を追いながら、18世紀にタイムスリップしているのである。だが、タイムスリップはこれ一回にとどまらない。歴史に深く通じていたスミスは、当時のイギリスの経済政策が誤っていることを示すために、古代エジプトやローマ、ギリシャの国々がどのような政策を行っていたのかを詳細に論じている。私たちは、同じ本の中で、今度は紀元前にもタイムスリップすることになる。

もっとも、本には人々が過去に調べたことや考えたことがつまっているのだから、タイムスリップに似ているのは当然であろう。しかし、図書館をタイムマシンと見なせる理由は、実はこれだけではないのである。

決してしてはいけないことであるが、本を借りた人がうっかり引いてしまったアンダーラインが残されていることがある。あるいは、遠い昔にこの大学で教鞭を執っておられた先生が研究のために読み、退職の時に寄贈された本であるのかもしれない。その本のなかで自分が重要だと思った一節に遭遇したときに、誰かのアンダーラインを見つけると鳥肌が立つ。何十年前前に、その知らない誰かは、なぜこの一節に注目したのか。私と同じ感想を抱いたのだろうか、と。また、現在ではもうなくなってしまった決まりごとであるが、本学部の図書館では、本を借りるときに、借りた日付と借りた人の名前を自分で記入する欄があった。今でも古い本を借りるときに、昔の記入シートが残っていることがある。知りたいことがあって、ひょっとしてあの本が手がかりになるのではないかと思い、その本を手にしたときに、何十年も前に同じ手がかりを求めた人がいたことを知る。とても面白い。知っている人であればなお面白い。その人はなぜこの本にたどり着いたのか。あの時代にこの本を読むことには、どのような意味があったのか、と。こうしたことも一つのタイムスリップである。図書館にある本は、その多くがすでに誰かに読まれた本であり、私たちは、その誰かがその本を手にした時のことを想像することができるのである。

インターネットが普及した今日では、学术论文や著作権の切れた本をダウンロードして自由に読むことができる。それは、多くの場合デジタルファイルであるから検索もできるし、パソコンに保存しておけば、かさばらず持ち運びも楽である。しかし、紙という媒体にもいいところがある。手垢や書き込みの跡は、人が本を読むことには必ず理由があるのだということを思い出させてくれるからである。私たちが読むことにも、スミスが古代史を研究したことにも、知らない誰かがアンダーラインを引いたことにもきっと理由があったにちがいない。読書が、自分や他人がなぜこの本を読もうとするのかという問いと切り離されることはない。むしろこうした問いに向き合うことによって、読書はより豊かなものになるのではないだろうか。図書館で本を借りるという行為そのものは、いずれ古くさい習慣として廃れてしまうかもしれない。だが、そのように過去や自分をじっくりと見つめ直す機会だけは失いたくないものである。